

2018年は、探究学習元年にしよう！

「いまの授業では解けない！」。これは、12月5日に掲載された朝日新聞の見出しです。何の記事かという、2021年1月から始まる大学入学共通テストの数学Ⅱ・Bのプレテストを受けた生徒の悲鳴に近い感想です。この感想を述べたのは、東京都立町田高校の生徒の中野日香理さんです。また、同じ学校の一戸碧生さんは、このようにインタビューに答えています。

「文脈の中から必要な情報を取り出す読解力が必要。数学らしくない」

少し、裏話をしましょう。実は、12月9日（土）に大学コンソーシアム京都が主催する第15回高大連携教育フォーラムに参加してきました。そのときに基調講演をしたのが、今回の高大接続改革を文部科学省で中心に進めている合田哲雄氏（現在は、内閣府参事として「人づくり革命」を担当。右の写真の人）。この合田氏の娘さんが、都立の町田高校の3年生で、同じ数Ⅱ・Bのプレテストを受けたい。合田氏が家に帰ると、娘さんに、

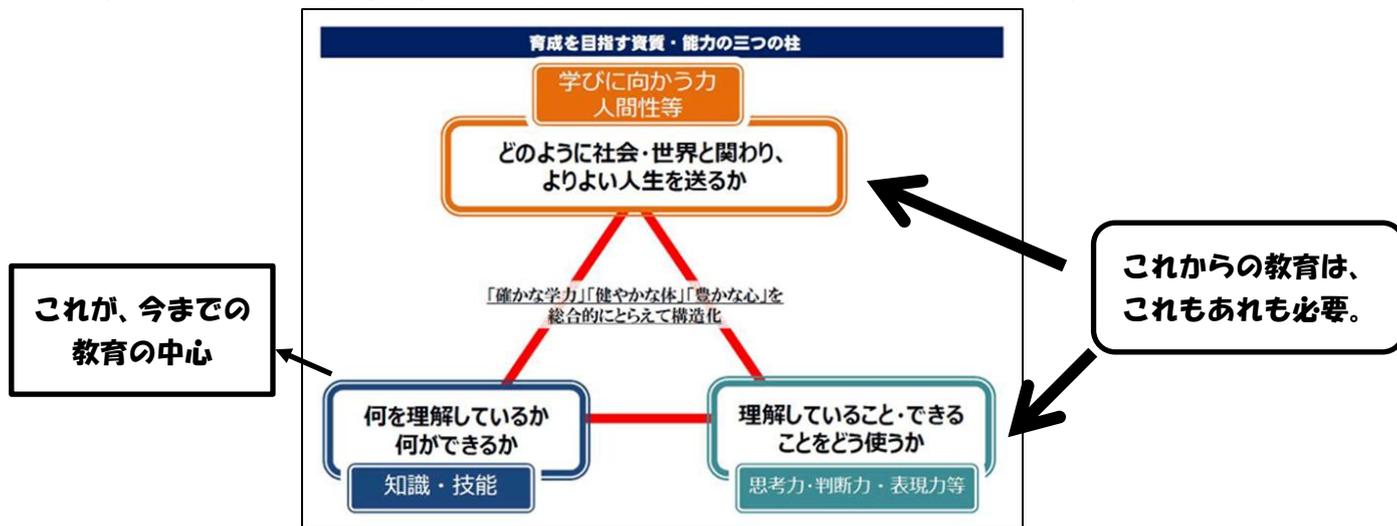
「お父さん！なんていうテストを作っているの！あんなテスト、解けるはずないじゃない！」

と、きつく怒られたらしいです。合田氏の娘さんによると、朝日新聞のインタビューに答えた中野さんも一戸さんも、学年トップクラスの優秀な生徒らしいですよ。



【1】大学入学共通テストは、何を目ざしている？

さて、今回の大学入学共通プレテスト。なんで、こんなテストが実施されるようになったのか？わかりますか？今文部科学省が進めている教育改革を一つの図で示したのが、下の図（文科省作成）です。



つまり、今までは、「何を理解しているか？」という知識を身につけることが中心でしたが、これからはその知識や技術を「どう使うか？」「社会にどのように役立つのか？」という視点が必要だということです。「何かとても

大変なことになっている」、「そんなことってできるの?」、「それって必要?」とってしまいますよね。でも、違うのです。これで、やっと

「日本の教育は世界水準に近づくことができる」

ようになるのです。それを説明しましょう。

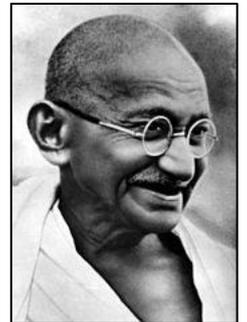
【2】考える歴史教育—イギリスの教科書から・・・



イギリスの11歳から14歳までの生徒を対象にした歴史教科書、『イギリスの歴史—帝国の衝撃 (THIS IS HISTORY The Impact of Empire)』を紹介しましょう。この教科書は、150ページと薄い教科書です。扱われている内容は、皆さんも耳にしたことがある『アメリカへの植民』から『植民地インドからの撤退』までを扱っています。この教科書のことを紹介してくれた佐藤優氏（左の写真の人。元外交官）によると、この教科書の特徴は、

「ユニークなのはその構成で、生徒に網羅的な知識を身につけさせようとはしていない。かつての帝国主義政策が、自分の身の回りにおいてどのような意味をもっているのかを徹底的に考えて、それらの出来事について自分の考えを書くことを求めているのだ。」（「超したたか勉強術」より）

というのです。果たしてどんな内容か？一つの例、みんなも知っている（知っているはず、知っていないと恥ずかしい）歴史的事実を取り上げましょう。この教科書の、



第11章、「帝国の終焉：なぜイギリスは1947年にインドから撤退したのか？」

です。皆さんもご存知のように、イギリスは、東インド会社を通してインドを植民地化しました。その歴史は何世紀にもわたるかなり長い期間です。しかし、第二次世界大戦後にインドのガンディー（知っていますよね！右のメガネをかけた人ですよ！）による「非暴力独立運動」が展開されます。その歴史を学ぶのが11章です。

この章での課題は、次のように設定されています。

本章の課題

現在は1947年の2月であると仮定してください。あなたは、ガンディーの支持者としてマウントバッテン卿に一通の手紙を書かなくてはなりません。あなたは、イギリスがすぐにインドから立ち去らねばならないと確信しています。手紙の中で、あなたはインドの歴史についての知識を駆使して、「インドからの撤退」を決断するときがきたとマウントバッテン卿を説得してください。



マウントバッテン卿って誰？と思いますよね。これは説明しましょう。インドに赴任した最後の総督です。簡単に言うと、イギリスを代表してインドを統治する最高責任者ですね（左の人。彼は、インドから如何に撤退するかの命をイギリス本国から受けていたようです。この人は、1979年IRAのテロにより爆死しています。これもイギリスの現代史ですね）。

さて、この課題の意味が理解できますか？これはインドの教科書ではなく、イギリスの教科書。イギリスは当時インドを植民地支配する側です。そのイギリスの中学生に、インドの立場に立ってマウントバッテン卿をインドから撤退させるための手紙を考えろといっているのです。この内容について佐藤氏は、

「『負の側面』である自分たちの過ちについて、日常生活を通じて感じ取ることは難しい。帝国主義における植民地支配経営は失敗した—これは厳然たる事実である。

だから、教育として、自国の失敗の意味を、将来を担う世代に考えさせなければ、生き残れることはできない—そんな姿勢がよく伝わる教科書なのだ」（前掲）

と言っています。

このような考える課題が第1章～第12章までずらりと並んでいます。極めつけは、終章、最後の章です。その章のタイトルは、

「あなたは大英帝国の歴史をどう見るか？－著者の考えに反論し、自分自身にも問い返してみよう」

となっています。ビックリしませんか？教科書の内容に反論しようと呼びかけているのです。日本の場合は、教科書の内容を覚え、理解し、吸収することを第一の目的としていますよね。イギリスの教科書は、その知識を十分に理解した上で、さらに大英帝国の歴史を自分で考えろと言っているのです。まさに、

「理解していることをどう使うか？」

であり、自国の帝国主義・植民地支配という負の歴史を学ぶことによって、未来のイギリスを担う若者を育てようとしている。まさに、

「どのように社会・世界とかわかり、よりよい人生を送るか？」

を考える教科書になっているのです。この大学入学共通テストにあるような教育の改革で、「**日本の教育は世界水準に近づくことができる**」という意味がわかってもらえたでしょうか？

【3】私たちは、何をすればよいのか？

それでは、私たちは何をすればよいのでしょうか？その前に、

「この大学入学共通テストって、次の1年生からでしょう！私たちは、関係ないやん」

と思いませんか？確かにそうです。あなたたちは、このテストを受けません。だからといって、身につけなければならない力が、突然次の1年生から変わるといのはおかしいでしょう？すでに、世界はずっと前から

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力・人間性など

というこれからの21世紀に必要な資質を身につけさせる教育を行っていて、やっと日本も遅ればせながらこの水準になろうとしているのですから。「**私たちには関係が無い**」ではすまされません。このことを理解していないと、社会人になったときに、

「先輩、ちょっとその考えはどうかと思いますよ。僕だったら、もう少し掘り下げますけど・・・」

「先輩が提案している企画って、社会にどれだけ貢献できるのですか？」

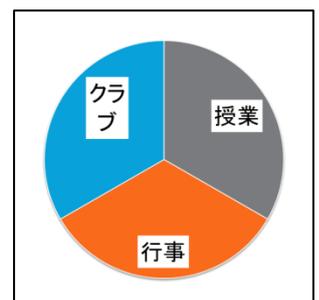
というような突っ込みを入れられるかもしれません（実際には、影で「あの先輩、仕事できないね。考えが浅いよ」といわれるでしょうけど・・・）

本題に戻りましょう。私が考えるには、今の〇〇高校は三色に彩られていると思っています。つまり、授業（学習）＋部活動＋行事です。図にすると、左の図になります。これは、〇〇高校だけではなくて多くの普通科の学校の現在の姿です。

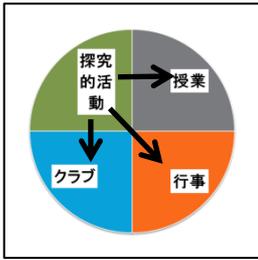
私は、この三色の学校生活にもう1色付け加える必要があると考えています。それが

探究的な学習

というものです。つまり、「授業＋部活動＋行事＋探究」ですね。そして、その探究的な学習は、他の3つの色にどんどん影響して、やがては、学校の色が「探究」をベースにして成り立っていると



ということが求められると思っています。図にすると、こんな感じです。



そうすると、「探究的な学習って何？」ってことですよ。それは、簡単にいうと、**自分の頭を働かせて、自分の考えを持ち、自分の言葉で表現すること**とってください。なぜ、このように言うかという理由があります。11月ごろから、3年生の国公立大学の推薦入試（エッ！そんな入試、国公立にあるの？と思わないでね。これからどんどん増えますよ。すでに旧7帝大の東北大学工学部は100名を超える推薦入試を実施中です）を受験する生徒の面接練習をしています。その生徒たちに私が課す課題は、簡単に言うと3つです。

①なぜその学部を選んだか？②なぜその大学を選んだか？③大学で何を学び、社会でどう活かしたいか？

です。これを受験生である3年生に聞くのですが、中々難しいようです。さらに、私は学問の中身まで質問します。農学部志望の生徒には「日本の農業の将来について」、教育学部志望の生徒には「日本の焦眉の教育課題について」、畜産学部希望の生徒には「日本の畜産の将来について」などと言ったように……。これもまた、難しい。だから、私はそれぞれの受験生に「読むべき本」を選んでプレゼントしました。

「最低限、これくらいの知識は知ってほしいし、その上で自分はどう考えるかをまとめておいで」という意味です。（国公立に限らず）大学の推薦入試を受けるときには、必要なことだと私は思っているのですが……。そこで、面接練習のときに、工学部志望のある生徒に聞きました。

校長：「1年や2年のときに、大学が開催する高校生向けのセミナーとか、リケジョの集まりとか行った？僕は、先生方に案内してね、生徒の背中を押してあげてね、と言ってるんだけど……」

生徒：「全然、行っていません。それにそんな集まりがあることも知らないです。知っていれば行けば良かった。後輩に言うておきますね。」

この状態を生徒の責任にするのはかわいそうですね。先生方もこの探究的な学習の大切さをあまり理解していないのかもしれない。だから、案内は教室に掲示するだけなのかもしれませんね。

この探究的学習を学校全体で取り組むために、1年・2年で「クエストエデュケーション」に取り組んでいますよ。これは府立高校では〇〇高校が始めての取り組みです（正確に言う▼▼高校も今年から実施しています）。

だけど、クエストがクエストだけで終わっては意味が無いのです。

自分の課題は何かを見つけ、自分で自分のクエストを始めること

これがクエストエデュケーションの本来の目的です。

さて、最後に私が考える探究的な学習の入り口を紹介しましょう！あくまでも入り口ですよ。

1. 大学が開催する様々なセミナーや研究、シンポジウム、学習会、合宿などに参加する。（実に様々な案内が私のところに届きますよ。特に夏休みなどに）
2. 海外の研修に参加する。〇〇高校もやっていますよね！どしどし参加してください。〇〇高校主催以外でも、トビタテJAPANは知っていますか？かなり支援してくれますよ。全国で多くの高校生が海外留学しています。それも2週間から実施できます。

だけど、上の二つは、金も時間もかかりますよね。ハードルが高いと思う人、簡単にできる探究的学習を紹介しましょう！それは、二つ！

本を読む！新聞を読む！

ということです。これは誰でもできます。すぐにできます。

さて、冬休みが始まります。この冬休み、とにかく本を一冊読みませんか？新聞を読み始めませんか？最初は記事の内容がわからなくても、読み続けるとわかるようになってきますよ。私も高校時代はそうでしたから！